

学習上のつまずきを放置するのではなく、外的リソースを活用して知識不足を補い、つまずきを乗り越える力は、学習者としての自立を実現する上で重要である。しかしながら、学習者は、最も身近なリソースである教科書を自発的には活用せず、活用の仕方も不適切であるという問題が指摘されている。本論文は、つまずきを解消するリソースとしての教科書の機能に焦点を当て、教科書活用を規定する要因ならびに教科書活用を促進する介入方法について、実証的・実践的アプローチを組み合わせ、多面的に検討を行ったものである。

第Ⅰ部では、教科書研究ならびに関連する心理学研究のレビューを行い、教科書活用の適切性を「活用回避」、「自律的活用」、「依存的活用」の3段階で捉える理論的枠組みを提案した。第Ⅱ部では、事例分析と授業観察による生徒・教師の実態把握と仮説抽出を行った。研究1では、個別学習相談の事例を分析し、教科書の活用が不十分な学習者の実態を明らかにするとともに、支援方法の探索的検討を行った。研究2では、教師が実際に教室場面においてどのように教科書を利用しながら指導しているのかを検討し、その特徴と問題点を明らかにした。

第Ⅲ部では、第Ⅱ部で抽出した仮説に基づき、要因検討ならびに介入方法の実証的検討を行った。研究3では、質問紙調査を行い、第Ⅰ部で提案した教科書活用の段階を精緻化するとともに、授業中の教師による教科書の使用頻度が、生徒の教科書に対する信念を介して生徒の教科書・参考書の活用に影響することを明らかにした。研究4では、教科書における教授箇所の明示と教科書へのメモ書きの推奨と、教科書・参考書を用いた教え合いを取り入れた授業法の効果検証を行った。教科書活用が促進された一方、学習成績には効果が生じなかった。その原因として考えられる教え合いでの説明の質が低いという問題を改善するために、研究5では、教科書へのメモ書きと概念的知識に焦点化した説明活動を取り入れた実験授業を行った。その結果、数学的概念の成り立ちについて説明を求める説明型問題では、教科書へのメモ書きの効果が有意傾向であり、教科書活用が成績にポジティブな効果を持つ傾向が示された。

第Ⅳ部では、第Ⅲ部の知見に基づく授業法を提案し、その効果を学校現場の中で検討した。研究6では、中学校において教科書活用法を教授する学習法講座を実施した。講座受講群は、遅延テストにおいて、教科書活用を通じた用語の定義の知識獲得が、非受講群に比べて高かったことを示した。研究7, 8は、高校教師と共同で、高校において授業法に変化を加える実践を行った。研究7では、主に教師の指導方法の変化に焦点を当てた。継続的な議論を通じて教授・発問スキルが教科書活用を促す形に変化してくプロセスを明らかにするとともに、そうした変化は教師の信念の変容が関わっていることなどを明らかにした。研究8では、主に生徒の変化に焦点を当てた。教師とともに共同で実践を1年間行った結果、生徒の教科書活用が促進されたことが明らかとなった。

教科書という、どのような経済状態にある子どもも等しく持っている資源を活用するという現代的なテーマを掲げ、基礎研究から学校現場での実践研究までを射程に入れた本研究は、優れた研究であると言える。より幅広い指標を用いた研究など、今後のさらなる展開可能性も議論されたが、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。